

認知モードにみる日仏名詞発話文について

青山学院大学非常勤講師
栗原唯

(y.kurihara.synthetique@gmail.com)

本発表の目的

- フランス語および日本語における名詞発話文が I モード認知に対応する表現であることを示す(→2.)
- 同一の言語使用条件下における、日本語およびフランス語の名詞発話文の振る舞いを観察、各言語の名詞発話文の使用特徴を記述する(→3.)

- (1) Un bon numéro. (Milano-San Lemo)
- (2) Attaque de Quintana. (Giro 2017_20_Fr)
- (3) Nibali qui passe. (Giro 2017_20_Fr)
- (4) ものすごい回転。(TDF_2016_12_Jp)
- (5) (今、みて...、)ガッツポーズ。(TDF_2015_18_Jp)
- (6) 五人になりました先頭集団。(Giro 2017_20_Jp)

1. はじめに

- 名詞発話文
 - ・ 名詞一語または名詞句一つにより構成される発話
 - ・ ある具体的な使用の場で、単なる概念の表示ではなく、固有の指示的価値を持つという機能的側面から定義¹
 - ・ 使用の場、発話内容は多岐に渡る

<不在または(再)発見の驚きの叫び>

- (7) La clé !
- (8) いぬ ! (山田 1936 : 912)
- (9) Tiens ! Le facteur qui passe ! (Furukawa 1996 :64)

<注文・依頼>

- (10) Un noir. (Bühler 2009[1934] :268)
- (11) おーい、お茶 ! (横森 2008 : 557)

¹ 発話レベルでの意味の充足・機能性からの名詞発話文の定義に関しては、Damourette et Pichon (1911-1927 : § I et VIII ; 1911-1930 : § XVIII-XX) や Benveniste (1966 : 151-167)に加え日本文法、とりわけ山田(1936 : 901)の句の定義を参考にした。

<眼前の対象同定>

(12) Le coureur de l'équipe FDG.

(13) (動くものを認め、目を凝らして)とら。(尾上 1998 : 898)

<光景へのコメント>

(14) Belle attaque !

(15) 良いアタック。

<直前の情報へのコメント>

(16) Excellente idée ! (Lefevre 1999 : 239)

(17) ナイスアイディア !

<実況での描写>

(18) Zidane, qui passe Platini. (Krazem 2011 : 122)

(19) 折しも、高らかに起こりましたバンドの演奏(坪本 1992 : 5)

<ト書きやあらすじの出だし、状況設定>

(20) Une chambre à coucher. La nuit. Une lampe sur une table. (Krazem, 2004 : 366)

(21) 元禄十五年極月の十四日。大石内蔵助をはじめ赤穂浪士四十七名は.....(尾上 1998 : 903)

<ト書きやあらすじの出だし、トピックの提示>

(22) Maître de musique, Maître à danser, Trois Musiciens, Deux Violons, Quatre Danseurs.
(Kurihara 2017 : 106)

(23) パリのモンマルトルに住みカフェで働くアメリ (Kaneko 2010 : 3)

<表示>

(24) Sortie

(25) 出口

<写真のキャプション>

(26) Valéry posant devant un portrait de Mallarmé pour Henri Cartier-Bresson, en 1945 (Le magazine littéraire automne 2011)

(27) 予選トライアルの女子かじなしフォアで競い合うチーム(坪本 1992 : 6)

- Kurihara(2017)では、日本語の喚体(山田 1936)の分析をモデルに、これらの名詞一語または名詞句による発話を主述関係の叙述ではなく、指示であるとした。
- 指示である名詞発話文の特徴としては、二重の直接性 *immédiateté* があげられる。(Kurihara 2020)

- i. 指示対象(つまり発話内容)は発話の場に対し常に直接的に定位される(つまり過去など、発話の場以外の対象は指示しない)²。
- ii. 名詞・名詞句の発話としての機能そのものに関わる直接性で、名詞発話文は実現された場を離れては機能しない³。

- 名詞発話文における発話の場、発話主体、指示対象の密接な関係は、Iモード(中村 2009)における認知の場、認知主体そして認知像の関係と相関していると考えられる。
- フランス語の認知モードについては春木(2011, 2012)、渡邊(2012)などの分析がすでにあり、特に春木(2011)においてフランス語はIモード的側面も多分に持っていることが指摘されている。

2. 名詞発話文の認知モード

2.1. 中村(2009)による2種の認知モード：IモードとDモード

➤ 中村(2009)による認識の定義

「私たちの認識は、いわゆる客観的に存在するものを単純に外側から観ているのではなく、観る・観られ関係に基づいてはいない。(…)ヒトとしての身体を有する私たち認知主体となんらかの対象(や環境)とのインタラクションに基づいて対象(認知像)が形成され、世界が立ち現われるとするのがもっとも妥当な立場である」(中村：358)

➤ Iモード(Interactional mode of cognition)(中村：358-362)

- ・ 認知主体と対象とのインタラクションに基づいて認知像が形成されるモード
- ・ 主客(認知主体と認知像)未分の認知モード
→認知する自分自身の意識をしていない段階⁴

➤ Dモード(Displaced mode of cognition)(中村：362-264)

- ・ 自己と対象とのインタラクションによって形成された認知像をメタ認知的に外から捉える認知モード
- ・ 主客の対峙がある認知モード
→認知する自分を自覚、対象を客体視するようになった段階⁵

(28) a. このりんごは食べられる。

² このことは、発話の場そのものが物理的・視聴覚的に発話を算出した話者のいる時空間とは異なるように定義されることが矛盾するものではない。

³ 但し名詞発話文が使用された状況が「再現」された場合は可能となる。

⁴ 「知覚作用と概念操作の主体である認知主体の意識が対象物や事態に向けられている場合は自分で自分の存在を意識することは通常ないので、知覚対象と認知主体の関係も同様に分離して考えることはない」(濱田 2013：77)

⁵ 「「メタ認知」とは、「自分自身が、自分自身を把握するという形で認知が成立する」という脳内現象であり、この能力があるために我々人間は自己の認知活動(知覚する、記憶する、理解するなど)を客体視し、それをモニターすることができ、また「自己評価」することが可能となる」(濱田 2013：77-78)

b. These curtains are washable. (中村 2009 : 364)

- ・ 日本語の「られる」文 (28a) はその場で認知主体が対象にインタラクトして得た印象、判断も表すことができ、I モード認知に対応することもできる。
- ・ 英語の -able (28b) は対象の客観的特性を伝えるのみで、D モード的。

➤ I モードと D モードを反映する対立要素 (中村 2009 : 3765)

I モード

- ・ 身体インタラクション的認知
- ・ 参照点型認知 (R/T 認知)
- ・ 非有界的認識

D モード

- ・ メタ認知的
- ・ トラジェクター・ランドマーク型認知 (tr/lm 認知)
- ・ 有界的認識

- ・ 身体的インタラクション認知
「直接経験」(中村 2009 : 353)、「real-time 処理(real-time processing)」(濱田 2013 : 77)
- ・ メタ認知
「認知の場の外に出て、認知の全体を眺める」(中村 2009 : 365)「鳥瞰図」(濱田 2013 : 82)
- ・ 参照点型認知 (R/T 認知)
「身近なわかりやすい物を参照点として次から次へとたどりながら、認知の標的(ターゲット, T)を捉えるような認知の仕方」(中村 2009 : 365)
→ 事態の展開を順にたどる把握⁶
- ・ トラジェクター・ランドマーク型認知 (tr/lm 認知)
全体を眺めて、その中の最も際立ちの高い参与体(トラジェクター)と二番目に際立ちの高い参与体(ランドマーク)に注目するような認知(中村 2009 : 365)
→ 全体を捉える鳥瞰的視点があって可能となる捉え方
- ・ 非有界的認識
「I モードはいわば対象の中に入り込む認知なので、全体を捉えることはできず非有界型の認知になる」(中村 2009 : 365)「事態を臨場的に捉える」(濱田 2013 : 81)
- ・ 有界的認識
「D モードはメタ認知として全体を捉えるので、有界型の認知になると考えられる。」(中村 2009 : 365)

⁶ 「事態をそれが展開する順にたどる把握の仕方となり、この順にたどるという認識が何かを目印(参照点(R))として目標物(T)を見つける把握の仕方を動機付ける」(濱田 2013 : 81)

- この対立は全てが必ず等しく関与するわけではない。 (「大なり小なり関与している」中村 2009 : 371)
- 春木(2014)が複合過去について「認知主体は認知の場の中にいるが、対象とのインタラクションはない」ことを指摘し、これがいわば「準 I モード的な対象把握の時制」(春木 2014 : 38)と述べているように、I モードから D モードへの移行は段階があると考えられる。

2.2. 考察

- 導入部で挙げた名詞発話文は、認知主体が事態を捉える認知領域という観点で、次の二つのグループに分かれる。

グループ 1 : 眼前の認知領域

グループ 2 : 語用論的に設定される仮想認知領域

2.2.1. グループ 1 : 眼前での事態の知覚に連動した発話

- ここでの直接経験はとりわけ視覚的な知覚
- 典型的な眼前の知覚のケース : 知覚事態の提示
 < 不在または(再)発見の驚き⁷の叫び >
 (29) =(7)La clé !
 (30) =(8)いぬ ! (山田 1936 : 912)
 →発話の機能が知覚に基づいている+情意を含むが言語化されない+事態内容把握には場の参照が必要
 →提示されるのはターゲット一項のみ。参照点型認知
 →非有界(「犬が飛び出した(有界)」や「犬が向かってくる」(非有界)と事態を表さず、犬によって引き起こされた何某かの認識がある事のみが示されている)
- < 不在または(再)発見の驚きの叫び(擬似関係節) >
 (31) =(9)Tiens ! Le facteur qui passe ! (Furukawa 1996 : 64)
 < 実況での描写⁸ >
 (32) =(18)Zidane, qui passe Platini. (Krazem 2011 : 122)
 (33) =(19)折しも、高らかに起こりましたバンドの演奏(坪本 1991 : 5)
 →発話の機能が知覚に基づき眼前の事態を表している
 →二重節構文(坪本 2009)/double prédication (Krazem 2004)。参照点型認知
 →モノと同時にコトを志向する「動きの断片」(坪本 2009)。非有界

⁷ 山田(1936)の感動喚体に対応するが、感動喚体は対象の認識につづく感動の表明と規定されており、そのため感嘆文として狭く捉える向きもあるが、強い情意を伴わない実際の事例も考えると大木(2006 : 355)も言うように認識・把握と広く捉えるべき。

⁸ 擬似関係節には Kaneko 2010 が指摘している通り、眼前描写ではないタイプもある。

- ・ 二重節構文(坪本 2009 : 310)
 - (34) 店の中をうろついている怪しい客
 - a. NP に注目せよ(客(NP)に注意(注目)せよ)
 - b. NP を中心とした事態を描写、叙述する(店の中を(NP)がうろついている(こと))
- ・ Double prédication (Krazem : 96-98)

« Cette structure se compose [...] d'une double prédication [...]. La prédication portée par le nom propre, puis celle de la relative. »
- ・ 動きの断片(坪本 2009 : 316)

「NP を限定する XP の作用は、あくまでも同じ<もの>の変化や差異を反映した、NP の位相であり、その局面を捉えたもの」⁹

→(29)(30)はIモード的側面が全面的に認められ、名詞発話文の中で典型的なIモードの発話。比較すると(34)-(35)はDモードへと向かう過程にある。

→ともに知覚した事態を提示する(29)(30)タイプと(34)-(35)タイプの差異はどこからくるのか

- ・ (37)のような XP-NP 文は(35)から一段階展開したものと言える (Krazem : 96-98)

« En citant le nom du joueur, le commentateur prédique son existence dans le monde actuel. La relative, facultative surtout à la télévision, vient préciser l'implication du joueur cité. Cela institue deux temps, qui ont chacun une certaine durée. »
- ・ (36)のような XP-NP 文は(35)から一段階展開したものと言える(坪本 2009 : 334)

「眼前描写の XP-NP 連鎖は、(35)のような喚体文において「意識が向けられ、<図化>された、ひとつの未展開な場面が最初に分節された(開かれた)場合」
- ・ 聞き手と共同注意(濱田 2013 : 87)

「[I モード認知の]話者にとっては言語化されない指示対象は認知の場に明確に存在している。(言語化が進むのは)話者は聞き手との共同注意の確立の有無や聞き手が対象をどの程度想起しやすいかを考えてどの程度詳しく述べるかを決定する」ことによる

➤ 眼前に知覚した事態の存在提示からより認識、判断よりになったもの

- ・ 坪本(2009: 307)

(XP-NP 連鎖について)「眼前の知覚の用法からより認識、判断の用法に拡張する傾向」

<眼前の対象同定>

(35) =(12)Le coureur de l'équipe FDG.

⁹ 岸(2014)も中継の現在と呼ぶ現在時制に同様の指摘を行っている。

(36) =(13) (動くものを認め、目を凝らして)とら。(尾上 1998 : カクニン)

< 光景へのコメント >

(37) =(14) Belle attaque !

(38) =(15) 良いアタック。

< 直前の情報へのコメント >

(39) =(16) Excellent idée ! (Lefevre 1999 : 239)

(40) =(17) ナイスアイディア !

→ 発話の機能が知覚に基づいている+情意性が下がっている

→ 事態の位置付けのため場の参照が必要

→ 新たな認知像の提示というよりは、聞き手の側の認知像の確認・修正

→ 提示されるのはターゲット一項のみ。参照点型認知

→ 非有界

➤ 提示形式が眼前に事態を発見させるケース

- ・ 言語表現が実物・写真に貼り付けられるように提示することで機能

« Etiquetage » de Bosredon¹⁰ (1997 : 16)

« Le mécanisme de l'étiquetage repose sur la présentation conjointe d'un objet et d'une désignation ou d'une dénomination au cours de laquelle s'opère un double repérage : désignation du support par l'étiquette mais aussi repérage de l'étiquette - comme instrument d'identification - par le support. »

- ・ 意味はこの共提示の場で補完される

濱田 (2013 : 84-86) によるラベルの注意書きの認知モード分析

薬ビンの注意書き「小児の手の届かない所に保管してください。」

乾燥剤の注意書き「たべられません」

「I モード認知では認知主体が対象と直接インタラクションすることでそれを把握することになるので、その対象を言語によって記号化するのではなく、むしろ実物そのものがそのまま意味の一部を担うことができることを端的に示しているものであり、いわば「実物+言語表現」で意味が完結」濱田 (2013 : 84)

< 表示 >

(41) =(24) Sortie

(42) =(25) 出口

→ 発話の機能が知覚に基づいている+事態内容把握には場の参照が必要

¹⁰ Bosredon 自身は Geach (1925) を参考に行っている。Bühler (2009[1934] : 272) の champ symphysique における言語使用のケースに該当する。

→提示されるのはターゲット一項のみ。参照点型認知
→<もの>としては有界だが、意味を持った発話として機能するのは、出口を探している、間違った場所から出ようとする最中→非有界

<写真のキャプション¹¹>

(43) =(26)Valéry posant devant un portrait de Mallarmé pour Henri Cartier-Bresson, en 1945 (Le magazine littéraire automne 2011)

(44) =(27)予選トライアルの女子かじなしフォアで競い合うチーム(坪本 1992 : 6)

→発話の機能が知覚に基づき眼前の事態を表している

→これらの例は二重節構文(参照点型認知)で、事態の終わりを示さない非有界的認知といえるが、キャプションとしては「日本カヌー女子チーム」のような<もの>の同定も可能、常に非有界的認知とは言えない。

→(29)(30)/(34)-(35)の関係と並行するように、(41)(42)はIモード的側面がより強く、比較すると(43)-(44)はDモードへと向かう過程にある。

→前者の知覚事態の提示(29)-(35)と比べると、後者の提示形式が眼前に事態を発見させるケース(41)-(44)は読み手の理解によっているため、インタラクションが必ずあるとは言えない。

2.2.2.グループ2 : 語用論的に設定される仮想認知領域

➤ 仮想の認知領域

「インタラクションを通した認知というのは、必ずしも認知や発話の時点に当該の事態が現実には起こっている必要はないのである ...発話空間においてその事態が感覚的に仮想しやすく、また既に 経験済みの事態ならば感覚的に再現されやすい事態であれば、認知領域内においてその仮想・再現された事態を認知主体がインタラクションを通して認知(できる)」春木(1991: 68)

- ・ 「認識上の「見え」の範囲」の聞き手との共同注意(濱田 2013 : 87-88)

対象物が発話時には存在しない場合

A:あの CD 結局どうしたの?

B:とうとう買っちゃったよ。

「Iモード的な認知で過去の事態を想起し、その中の特定の対象物(この場合 は CD)を話題にしているのであり、その事態を経験の中で共有しているからこそ、互いの「認識上の「見え」の範囲」にある対象物に対する共同注意が成立し、互いの会話が成り立つ」

→直接知覚を伴わない心的知覚のレベルでも同様の認識が可能(濱田 2013 : 89)

→これは聞き手との間で構築される

¹¹ 写真などのキャプションにおいて、画像を出発点にし、あたかも事態を経験しているかのように提示する代名詞çaの使用について、これがIモード的であることが春木(1991 : p68)で言及されている。

<注文・依頼¹²>

(45) =(10)Un noir. (Bühler 2009[1934] :268)

(46) =(11)おーい、お茶！(横森 2008 : 557)

→店員・客、目上の者・目下の者などの関係から語用論的に仮想の認知領域が設定される

→発話の機能はこの領域に留まっていることで保障される(Kurihara 2017)+事態内容把握には場の参照が必要

→提示されるのはターゲット一項のみ。参照点型認知

→実現を望む事態を提示するものなので非有界

・ 表現の持つ illocutionary force と I モード(中村 2009 : 370)

「特に表現の持つ illocutionary force が、単純に話し手の意図する発話の力を聞き手が算出するというものではなく、話し手と聞き手、それに状況的・談話的コンテキストをも絡めた総体的なインタラクションから創発するという観点(Marimaridou (2000 : Ch. 5))は、I モードにおける認知像の構築ということと共通するところが多い。

➤ 以下のト書きや新聞のケースは、“見るべき”シーン(ト書き)や“本日のニュース”が提示される場

<ト書きやあらすじの出だし、状況設定>

(47) =(20)Une chambre à coucher. La nuit. Une lampe sur une table. (Krazem, 2004 : 366)

(48) =(21)元禄十五年極月の十四日。大石内蔵助をはじめ赤穂浪士四十七名は……(尾上 1998 : 903)

→発話の機能はこの前提により保障される

→より身近なものから、遠い細かいものへと参照していく参照点型認知

→継起的に提示、また指示的側面もあり、総括的な視点を持って閉じた事態を提示しているというよりは非有界的といえる。

<ト書きやあらすじの出だし、トピックの提示>

(49) =(22)Maître de musique, Maître à danser, Trois Musiciens, Deux Violons, Quatre Danseurs. (Kurihara 2017 : 106)

(50) =(23)パリのモンマルトルに住みカフェで働くアメリ(Kaneko 2010 : 3)

→発話の機能はこの前提により保障される

→より身近なもの(主人公<登場人物<もの<…)>から提示していく参照点型認知

→指示的側面もあり、総括的な視点を持って閉じた事態を提示しているというよりは非有界的といえる。

→(29)(30)/(34)-(35)の関係と並行するように、(45)(46)はIモード的側面がより強く、比較すると(47)-(50)はDモードへと向かう過程にある。

→提示形式が眼前に事態を発見させるケース(41)-(44)では読み手の理解次第だったが、こ

¹² Bühler(2009[1934] : 268)の champ sympratique における言語使用のケースに該当する。

の最後のケース(45)(50)は発話者と受け手が同じ認知領域に身を置くことを前提として機能するもので、この観点からは知覚事態の提示(29)-(35)に近いと言える。

➤ まとめると以下のようになる

I モード的 側面	眼前の認知領域		語用論的に設定される仮 想認知領域
	眼前での事態の知覚	提示形式が眼前に事態 を発見させる	
+++	La clé !	Sorti	Un noir.
++	Tiens ! Le facteur qui passe !	Valéry posant devant un portrait de Mallarmé.	Une chambre à coucher. La nuit. Une lampe sur une table.

3. 日本語名詞発話文とフランス語名詞発話文の比較検討

➤ 日本語・フランス語で対応しているように見える名詞発話文(取り直し)

- (51) =(1)Un bon numéro. (Milano-San Lemo)
- (52) =(2)Attaque de Quintana. (Giro 2017_20_Fr)
- (53) =(3)Nibali qui passe. (Giro 2017_20_Fr)
- (54) =(4)ものすごい回転。 (TDF_2016_12_Jp)
- (55) =(5) (今、みて...,)ガッツポーズ。 (TDF_2015_18_Jp)
- (56) =(6)五人になりました先頭集団。 (Giro 2017_20_Jp)

- ・ 両言語で対応しているように見える形式(名詞発話文)・認知モード(I モード)
- ・ 実況において、日本語の XP-NP 連鎖(坪本 2009、金子 2010)、フランス語の疑似関係節他名詞発話文(Krazem 2004、岸 2014)が観察されている。
- ・ 日本語の XP-NP 連鎖とフランス語の疑似関係節の対応性は金子 (2003)でも指摘されている。

➤ 本当に等しい機能を果たしているか？

➤ 西嶋(2014)では言語比較における、翻訳を利用した比較を問題視、機能上等価な日独の公共空間サイン表現 を比較検討

「翻訳という作業はその過程で、翻訳者個人の意識的・無意識的な文体特性による個人差や起点言語の構造的影響を排除することが難しい。そのため、2 言語間で、翻訳関係にある対応する文どうしの単純な比較は、比較可能性という観点から疑問なしとしない。(2014 : 34)

2 言語間で対応する表現をより客観的に比較できるようにするためには、比較される 2 つの言語が使用されている地域において機能的・意味論的に等価で、自然な表現を資料として分析する必要がある (2014 :36)

- 刻一刻と変わる事態をその最中で捉え提示する要請が強いと考えられるスポーツ実況を題材に、同一のレースに対する各言語の実況を比較する。
- コーパス : 200km5 時間ちかくをかけて行われる自転車ロードレース。静的瞬間と動的瞬間が混在。

1-Paris-Roubaix_2017

2-Tour de France_2015_18(TDF)

3-Miano-San Lemo 2018

4-Giro d'Italia_2017_20(Giro)

- 名詞発話文の選別

・日本語における問題

題目の左方または右方遊離頻発

格助詞を用いた体言止めは除外

こちらは+名詞 こちらはデュムラン

～が+名詞 デュムランが落車

・フランス語における注意点問題

発言が中断されることなく継続し、高ピッチがキープされる傾向。発話の終末が特定困難構文上明らかに前後の発話に組み込まれない名詞・名詞句の使用を名詞発話文とした。

3.1. 考察

- 全般的な特徴

- ・ 全体の発話の量の差
- ・ フランス語放送での名詞発話文の頻発

Milano-San Lemo_Jp



Milano-San Lemo _Fr



(57)

	Milano-San Lemo _Jp	Milano-San Lemo _Fr
俯瞰図	間 -サイクリングアカデミーの選手 ですかね	間 Allez Krists Neilands qui tentent de sortir effectivement On l'a vu présence...
俯瞰図から アタック	-おそらくクリスト・ニーランズ ですかねアタックですね 間	-Ah, Nibali attaque -oh là là belle contre-attaque de l'élan de ce jeune coureur-Nibali Nibali sui?? Patrick, Attaques de Nibali
ズーム	-これニバリが付きます 後ろか らニバリ -ニバリがが付きましたねー 間	Cette fois il ne va pas laisser partir Neilands -Attention -et l'on est maintenant justement vers le sommet à cet endroit le plus pentu le sommet ...
前カメラ	-イスラエルサイクリングアカデ ミーの選手のアタックに乗じて ニバリが飛び出してこれグイグ イ開きますよ 間 -さあ後ろからももう一人いきま したね 間 -カチューシャ スピラクです シ モンスピラク 間 イスラエルサイクリングアカデ ミーはやはりニーランズです ラ トビアのチャンピオンジャージ さらにはニバリ 反応したのがカチューシャのス ピラクです後ろからジョイント しようとするところもう 1 人來 ています	-Ça va attaquer encore sur la gauche de la route je pense à Katucha on dirait l'allure comme ça -En tout cas ces moments pour sortir c'est pour les puncheurs -Et oui le Katucha Spilak on dirais non ? -Oui c'est bien lui Simon Spilak Spilak est sorties effectivement Ce petit gabarit de la formation Katusha qui va essayer d'opérer la jonction avec des Nibali Nibali qui fait diversion Nibali qui pour l'instant est en train de réaliser un bel écart par rapport à ses poursuivants -Oui un bon numéros Nibali là

➤ 共通した使用が見られた点

<試合経過のマーカーとなる情報>

(58) ファイナルラップの鐘がなりました、このベロドローム残り一周 (Paris-Roubaix 2017_Jp)

(59) サムエルサンチェスとモレマが復帰をなんとか試してますけどもね
-もうまもなく残り 1 キロポイント。

ここです。1 キロポイントすぎました。 (TDF 2015_18_Jp)

(60) (少し先にラスト 1 キロの赤い旗) La flamme rouge du dernier kilomètre
(Paris-Roubaix 2017_Fr)

(61) il y a dans une petite dizaine de secondes- Une dizaine de secondes-une
cabine téléphonique

-Allez le virage de la cabine téléphonique ici

Attention on va déclencher le chrono. (Milano-San Lemo_fr)

<選手の特定>

(ベロドロームに先頭が入ってくる)

(62) 優勝候補本命の一人ヴァンアヘルマートそしてその後ろにはトムボーネンのチームメイトスティバルそしてその後ろにはさらにはキャノンデールのラインヘルト

-ランヘヘルトもねまあまあスプリントありますからね (Paris-Roubaix 2017_Jp)

(63) -c'est terminé pour le malheureux Daniels Oss qui a été absolument
incroyable durant toute la journée mais qui ne sera plus d'aucun secours
bien sûr pour greg van avermat

-6 hommes avant désormais avec Zdenek Stybar, Gianni Moscon,
Sebastian Langeveld Jürgen Roelandts, Jasper Stuyven et Greg Avermaet
alors qu'on a un coureur intercalé c'est Bernhard Eisel, le vétéran de
l'équipe Dimension data qui est intercalé entre le groupe Avermaet et le
groupe Boonen. (Paris-Roubaix)

<突発的性が高い事態またはゴール時では名詞発話文がどちらにも現れる>

(64)

(Paris-Roubaix 2017_Jp)	(Paris-Roubaix 2017_Fr)
そしてスティバルが行った ス ティバルが行った-これちょっ と	Zdenek Stybar qui produit son effort maintenant Un Sprint à cinq - Il est costaud
-スティバルが行った	-Il est costaud Zdenek Stybar Stybar -C'est pas perdu
-やばいぞ	

-そしてファンアヘルマート フ ファンアヘルマート-スティバー ル いい -最終コーナー回ってスティバー ル ファンアヘルマート-アーヴァ ンアヘルマート -ヴァンアヘルマートがかわした ヴァンアヘルマートだ -きたー	- qui a pris de longueur -c'est pas perdu Van Avermaet - Zdenek Stybar qui a pris de longueur et qui va remporter Paris Roubaix -Van Avermaet -Victoire pour Greg Van Avermaet qui termine le plus fort et qui s'impose devant Zdenek Stybar deuxième comme il y a deux ans Victoire pour Greg Van Avermaet belge de l'équipe bmc
--	--

→但し、フランス語の場合は修飾語が長く続く傾向

(65)

(Milano-San Lemo_jp)	(Milano-San Lemo_fr)
-おおっ！-おおっ！-と落車-とお っ 間 いやー ロット 間 ロット・ソウダル… -ロット・ソウダル グライペルで すかね -グライペルですかね	Oh là là une chute derrière -Oh là là -Deux hommes-Lotto ??- sont tombés coureurs de l'équipe Lotto Soudal difficile de vous dire dans ces conditions de qui il s'agissait.

➤ 日仏の名詞発話文使用の差異

フランス語

<NP+qui 構文を多用>

(66) 状況描写

(Milano-San Lemo_jp)	(Milano-San Lemo_fr)
まあ後ろの集団をどのチームがコン トロール… <u>あっとにニバリまた行ってますよこ れ</u> -ニバリこれ離しましたね ニーラン ズのさらに前です -一人で行こうとしていますね	Nibali continue -Oh la la -Oh là là Nibali qui insiste maintenant pour lâcher peut-être son compagnons d'échappée il veut terminer tout seul.

(67) レース展開に動き

(Milano-San Lemo_jp)	(Milano-San Lemo_fr)
さあ GPS では12秒ですけども 集団 ああっ とおっ <u>抜け出したの</u> <u>は…</u> -121番ですね ミッチェルトン・ス コット トレンティンです -トレンティン行きました	-Je vous l'avais dit que Michal Kwiatkowski- <u>Trentin</u> - ne pouvait pas continuer <u>-Trentin allez Matteo Trentin qui sort</u> <u>maintenant du peloton pour essayer de</u> <u>rejoindre Vincenzo Nibali</u> Il est sorti tout seul

(68) 選手の動作

間	Allez <u>Vincenzo Nibali qui aperçoit au loin la</u> <u>flamme rouge</u>
---	---

日本語

<実況に余裕があり、コメントを加える>

(69) これは止まってしまった

-まったりとした空気になっていますこのグループボーネン・グループサガン い
ま

これでどんどん差が開いていってますから

-ボーネン黄色から赤信号よりか さあチャンスですヴァンアヘルマート (Paris-
Roubaix 2017_Jp)

(70) (ゴール後に)

彼も落車がありました。うー

-何なんだっていう感じですよ アピールで これは

-あってはならないことが起きてしまいました第12ステージ Mont Vantou

逃げていたリッチーポートとフルームが落車

<眼前にない内容>

(71) いやあ、フランスのため息が歓喜にかわりますね。 昨日、再三フランスのテレビ
で流されたというねあのピノの落車。(TDF 2015_18_Jp)

(72) -いやあ頑張りますね。 今年は上位進出を狙いたいという、ステージ表彰台に上が
りたいんだというユンゲルス (Giro d'Italia 2017_20)

<動詞文で発話した後に名詞発話文で繰り返す>

(73) -さあ お 行った

-キンタナ行った

-キンタナが仕掛けた キンタナアタック

-さあニバリ ついて行きたい

-キンタナアタック さあニバリ ニバリはついて行きます

さあここがまたすごいですね 熱狂的な観衆が待ち受けております

さあキンタナ ニバリ この二人

-とにかく前の二人と合流して四人で先頭交代して…まだ(Giro d'Italia 2017_20)

<状況総括>

(74) -なるほどね。さあこちら先頭です。 ザッカリン、逃げのザッカリン、ポッツォヴ

イーヴォ 逃げの二人

<継続状態の描写>

(75) デュムランがスタンドで追いかけて行きます。 ダンシングで追いかけるデュムラ

ン。 さあピノが行った。(Giro d'Italia 2017_20)

4. まとめ

まず日本語およびフランス語の名詞発話文はともにIモード的発話であることが確認できた。但し名詞発話文の中でもよりIモード的側面の強いものと、そうでないものがあり、やはりIモード認知には段階があると言える。

名詞・名詞句によるIモード的発話として、日本語およびフランス語の名詞発話文は対応しているように思われるが、実際には、等しく眼前の描写を行う要請がある場でも、その使用は完全に一致するものではなかった。両方の言語で名詞発話文が同じように使用されるケースは以下の二点にまとめられる：

- ・ レース中継という広い意味での認知領域で解説・視聴者の関係から強く要請される要素の提示・同定
- ・ 「犬！」の驚きのような無意識的自発的に発されるケース

以上のケースを除いては、日本語およびフランス語の名詞発話文が一定して並行的に使用されることは多くなく、それぞれの言語において名詞発話文が果たす役割は異なっているように思われる。日本語では、名詞発話文は直接知覚の臨場感を与えるというよりは、認知対象の捉え直しを測ったり(69-73)、進行中の過程を内的視点から描写するようであった。一方フランス語は、対象事態のタイプに拘らず、名詞発話文、とりわけ長い修飾語を持つ擬似関係節を多用しており、これにより参照点型認知を繰り返すことで、視聴者の注意を引き続けるように用いられていると考えられる。また日本語の現場描写のXP-NP連鎖はしばしばフランス語の擬似関係節と対応するものとして分析されてきたが、少なくともこの発話の場においては必ずしも対応しているとは言い難い結果となった。この結果はまた、西嶋(2014)の「比較される2つの言語が使用されている地域において機能

的・意味論的に等価で、自然な表現を資料」を分析するというアプローチの有効性を示すものと言える。

今後の展望としては、この試みで得られた最初の傾向をもとに、名詞発話文が使用される瞬間(前後)に眼前に展開されている事態、談話との関連をより詳しく、規模を広げ観察して行くことで、名詞発話文の機能をより細やかに記述することができるものと期待できる。

参考文献

- Benveniste, E. (1966), *Problèmes de linguistique générale 1*, Paris, Gallimard, 151-167.
- Bosredon, B. (1997), *Les titres de tableaux : une pragmatique de l'identification*, Paris, Presses universitaires de France.
- Bühler, K. (2009), *Théorie du langage traduit par Didier Samain*, Marseille, Agone. [Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache, Verlag von Gustav Fischer in Jena, 1934].
- Damourette, J. & Pichon, E. (1911-1927), *Des mots à la pensée : Essai de grammaire de la langue française 1*, Paris, d'Artrey.
- De Carvalho, P. (2005), « “Phrase nominale, “partie du discours” et théorie syntaxique” », In : I. Behr, J. François, A. Lacheret, F. Lefeuve (dir.) *Syntaxe et Sémantique : Aux Marges de la prédication*. 6 : 87-102.
- Furukawa, N. (1996), *Grammaire de la prédication seconde*, Louvain-la-Neuve, Duculot.
- Guillemin-Flescher, J. (2005), « Les énoncés averbaux : de l'identification à l'évaluation. » In : I. Behr, J. François, A. Lacheret, F. Lefeuve (dir.) *Syntaxe et Sémantique : Aux Marges de la prédication*. 6 : 132-162.
- Guillemin-Flescher, J. (2011), « L'énoncé averbal : repérage et subjectivité », In : I. Behr et F. Lefeuve (éds.), *Les énoncés averbaux autonomes entre grammaire et discours*, Paris, Ophrys, 11-30.
- 濱田英人(2013)「日英語話者の視点構図と事態内参与者の言語化／非言語化」『文化と言語：札幌大学外国語学部紀要』78：75-94.
- 春木仁孝(1991)「ça pleut / il pleut—現代フランス語の“非人称主語”の ça をめぐって」『ロマンス語研究』24, 日本ロマンス語学会, 27-34.
- 春木仁孝(2011)「フランス語の認知モードについて」『言語における時空をめぐって』IX, 大阪大学大学院言語文化研究科：61-70.
- 春木仁孝(2012)「フランス語における事態の認知方策について」『言語文化 研究』38, 大阪大学大学院言語文化研究科：45-65.
- 春木仁孝(2014)「フランス語の時制と認知モード 時間的先行性を表さない大過去を中心に」春木仁孝/東郷雄二(編)『フランス語学の最前線』2, ひつじ書房：1-44
- 金子真(2003)「擬似関係節と喚体句」『フランス語学研究』37, 48-53.

- Kaneko, M. (2010), « Diverses fonctions discursives d'une phrase averbale en japonais formée par la séquence < proposition subordonnée + syntagme nominal > », *Discours [en ligne]* 6, Presses Universitaires de Caen. <http://journals.openedition.org/discours/7768> (2016 年 6 月 20 日アクセス)
- 岸彩子(2014)「情報の部分性と全体性 実況中継に用いられる現在形を巡って」春木仁孝/東郷雄二(編)『フランス語学の最前線』2, ひつじ書房 : 215-248.
- Krazem, M. (2004), « La phrase averbale dans les didascalies », In : *Verbum* 26, 3 : 354-372.
- Krazem, M. (2005), « le présent sportif », In : C. Despierres et M. Krazem (éds.), *Du présent de l'indicatif*, Dijon, Centre Gaston Bachelard : 77-117.
- Krazem, M. (2007), « Infinitif et nominalisation : une seule ou deux catégories ? », *L'Information Grammaticale* 114 : 46-52.
- Krazem, M. (2011) « », In : F. Lefeuve et I. Behr (éds.), *Les énoncés averbaux autonomes entre grammaire et discours*, Paris, Ophrys : 11-30.
- Kurihara, Y. (2017), *Les énoncés nominaux en français écrit au regard du japonais*, Thèse de doctorat, Université Sorbonne nouvelle – Paris 3.
- Kurihara, Y.(2020), « L'immédiateté des énoncés nominaux en français au regard de la théorie du kan-tai » 『フランス語学研究』49、日本フランス語学会、1-22.
- Lefeuve, F. (1999), *La Phrase averbale en français*, Paris, L'Harmattan.
- 町田章 (2012)「主観性と見えない参加者の可視化-客体化の認知プロセス-」『日本認知言語学会論文集』12 : 246-258.
- 中村芳久(2009)「認知モードの射程」坪本篤朗/早瀬尚子/和田尚明(編)『「内」と「外」の言語学』開拓社 : 353-393.
- 中野研一郎(2005)『「意味」と「言語形式」の関係を創発・拡張・破綻させる「認知モード」における「主観」の存在』言語科学論集 11: 1-34
- 西嶋義憲(2014)「公共サインにおける言語表現の日独比較 : 新しい言語比較の手法の提案とその有効性の検証」『ドイツ文学論集』47. 日本独文学会中国四国支部 : 32-46
- 大木一夫 (2006)「換体的な文と文の述べ方」『文化』69、東北大学文学会 : 363-344.
- 尾上圭介(1998)「一語文の用法: “イマ・ココ”を離れない文の検討のために」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院 : 888-908.
- 坪本篤朗(1992)「現象[描写]文と提示文」石綿敏雄他(編)『文化言語学』三省堂 : 564-578.
- 坪本篤朗 (2009)「〈存在〉の連鎖と〈部分〉／〈全体〉のスキーマ —「内」と「外」の〈あいだ〉—」坪本篤朗/早瀬尚子/和田尚明(編)『「内」と「外」の言語学』開拓社 : 299-351.
- 渡邊淳也(2014)「叙想的時制、叙想的アスペクトと認知モード」春木仁孝/東郷雄二(編)『フランス語学の最前線』2, ひつじ書房 : 177-213.
- 山田孝雄(1936)『日本文法學概論』寶文館.
- 横森大輔(2008)「名詞一語が「文」になるのはいつか」児玉一宏/小山哲春(編)『言葉と認知のメカニズム』ひつじ書房 : 557-569.